盗伐

林業現場からの警鐘

田中淳夫

新泉社

目次

序章　目にした異様な山の光景 006

1 いにしえからあった盗伐 015

1 盗伐はいつから始まったのか 016
2 木一本首一つの厳罰対策 020
3 「夜明け前」の入会林野 026
4 盗伐は雷鳴の響く夜に 030

2 盗伐事件の現場から 035

1 「盗伐」の法的な位置づけ 036
2 宮崎県国富町の事件 042
3 宮崎市高岡町の事件 054
4 宮崎県えびの市の事件 064
5 兵庫県佐用町の事件 076
6 鹿児島県霧島市の事件 084

3 「山が消えた」被害者の会設立へ 093

1 戦う盗伐被害者の登場 094
2 宮崎県盗伐被害者の会の結成 102
3 宮崎県の盗伐被害者の特徴 108
4 盗伐発覚後の開き直りと言い訳 114
5 警察による二次被害の実相 118

4 盗伐する側の論理 127

1 木材需要が膨んだ論理 128
2 大量伐採を必要とする論理 134
3 監視が抜け穴だらけの論理 140
4 ブローカーが転売する論理 145
5 仕事をしたくない警察の論理 149

5 世界中で頻発する盗伐事情 161

1 熱帯諸国で起きる違法伐採 162
2 北米で狙われる巨木林 171
3 欧州を巡る林業界の闇 179
4 油と牛肉に化ける森林 185

6 世界の違法木材対策の動向 195

1 成立相次ぐ違法木材禁止法 196
2 EUの森林破壊防止規則 201
3 抜け道を用意したクリーンウッド法 206
4 NGOが生み出した森林認証制度 211
5 監視する国際環境NGOの実力 216

7 絶望の盗伐対策 221

1 遵法精神欠如と事なかれ主義 222
2 腐る林業と崩壊する地域社会 231
3 災害を招き地球を壊す林業 235
4 隔靴掻痒の盗伐防止策 242
5 試行続く盗伐を発見する手段 250
6 盗伐対策に必要な専門人材 254

おわりに 260
参考文献一覧 266

デザイン――三木俊一（文京図案室）

序章

目にした異様な山の光景

田畑の広がる合間にポツンポツンと低い丘のような山が盛り上がっている。足元の小川からは水音が響く。空は青空。のどかな、典型的な日本の原風景のようだと感じる。

宮崎県中部の国富町（くにとみちょう）の山間（やまあい）の光景だ。訪れたのは二〇一九年の五月二二日。明るい日差しの中でこの風景を眺めていると心が落ち着く。そんな気分に浸っていると、案内してくれた海老原裕美さんは、道から数百メートル離れた水田の向こう側の高さ二〇～三〇メートルの小さな丘を指差した。

パッと見には緑のスギ林に覆われている。が、何か変だ。スギ木立のその後ろに茶色の地肌が透けて見える。斜面の一部も崩れていた。

水田の間を進んで近づくと、違和感の正体がわかった。麓のスギ木立は一列残している

だけ。その裏側は丸裸なのだ。そのスギ木立を抜けて、列の裏側に登った。赤土の表土は削れ、数日前の雨のせいか泥沼と化している。細い丸太が折れたり何本も複雑に絡み合って山となり、いくつも放置されていた。それらを乗り越えてクローラー（キャタピラ）跡の残る山肌斜面を登る。とても道とは言えない重機で削っただけの斜面だ。足元が土にめり込むのを感じつつ、ようやく尾根に立つと、すさまじい光景が目に入った。

赤茶けた土が剝き出しの山が遠くまで広がり、谷はV字に削れ、枝葉で埋められている。スギの切り株が割けていた。太さは二〇センチから三〇センチ級のスギが生えていたことがわかる。また広葉樹の切り株もあったが、ギザギザの切り口を見せていた。どうしたらこんな乱暴な伐り方ができるのか、と思ってしまう。

無残な伐採跡は丘の頂部に広がり、全体ではざっと五ヘクタールぐらいあるだろうか。比較的平坦なのだが、表土が掘り返されているので歩くのも困難な様子だ。

荒れた斜面からは土砂が流れ出ていて、麓の溜め池を埋めていた。さらに麓の水田にも土砂が襲っている。用水路も重機が強引に乗り越えたためか破壊されていた。

「八カ月ほど前に急に伐採が始まりました。所有者の一人が気づいて警察を呼んで止めたのですが、翌日行ったらまた伐採していたそうです」

海老原さんは語る。宮崎県盗伐被害者の会の会長だ。

ちなみにこの土地の所有者は数人に分かれている。だから尾根には、数メートル間隔でコンクリートの杭が打ってあった。これは所有の境界線を示すもので、測量して行う地籍調査も済んでいるわけだ。伐採する場合は、それぞれの所有者の了解を得なくてはならず、もっとも気をつけないといけない点である。

しかし、この現場ではその杭をまたいで伐採が行われている。これを見落とすことは、通常有り得ない。明らかに無視したことがわかる。一方で外側のスギ一列を残すという面倒な伐り方をしているのは、外から見えにくくするために工夫したのだろう。とにかく樹木を早く伐採して木材を持ち出すための乱暴で破壊的な伐採と、発覚を遅らせるための姑息な手段が同居している。

無断伐採に気づいて現地に駆けつけた際、伐採を止めて現状保存を要求したのだが、しばらく後に再び現地を訪れると，伐った木は全部持ち出され、重機類も姿を消していたそうだ。ただ現場の状況を撮影していた。その写真に写るハーベスタ（乗用で木を伐採して運べる高性能林業機械）には、「黒木林産」の名と「平成二八年度日向市森林整備加速化・林業再生事業（基金）」と記されている。つまり補助金で購入した機械ということだろう。通常ハーベスタは数千万円する。

その後、海老原さんに案内されていくつか無断伐採の現場を回ったほか、被害者に会って話を聞いた。そこでわかったのは、このような事件は、宮崎県では珍しくないということだ。むしろ頻発している。そもそも海老原さんも盗伐被害を受けた一人だ。詳しくは本文に記すが、ここまで盗伐が蔓延しているとは思わなかった。

長年各地の森林や林業現場を訪ねて取材をしてきた。また東南アジアやニューギニアなど海外の林業現場を訪ねたこともある。そこでは、盗伐の話も耳にした。

おそらく昔から、盗伐は行われてきた。それは広い森からこっそり何本か木を抜くような所業だ。山主さえ気づかずに終わったケースもあったに違いない。また盗伐の首謀者は、たいてい身内か近隣の見知った人だったという。賠償を要求するにしても、内輪で処理する。表沙汰にしにくいのである。盗伐とは、ひっそりと行われるものだった。

だが、宮崎県で見て歩いた盗伐現場はまったく違う。大規模で、意図的、組織的だ。しかも森林破壊度が格段に高い。樹木を盗むのではなく森を盗む、消し去る行為ではないか。しかも高額で操縦も熟練しなければ動かせない林業機械を駆使して行うのだから、素人のできることではない。

宮崎県で何が起きているのか。いや、日本全国の林業現場、さらには世界中の森で何が起きているのか。

違法行為で森を破壊するケースは、世界中に広がっている。それは環境面でも経済面でも重大な事件だ。それを取り締まるのは喫緊の課題となってきた。一九九二年に開かれた地球サミットの中心議題は森林破壊防止であった。その手段として、違法伐採による木材取引を止める取り決めがつくられるようになった。

日本でも、世界の趨勢に引きずられるように違法木材対策に取りかかりだした。が、かなり抜け穴だらけの上、内容は輸入材を念頭に置いている。違法伐採は外国で行われ、その輸入が問題とされた。関係者から「国産材を使えばいい。国産材はみんな合法だから」という発言もあった。違法伐採を阻止するというよりも、国産材の需要を伸ばしたい意図が透けるが、私はそこに引っかかった。

盗伐は発展途上国だけで日本は真っ当だとする決めつけが、日本の林政担当者や林業関係者にある。だが日本の林業が「みんな合法」という裏づけは、どこにあるのか。こうした文言が発せられることに危機感を持った。何も知らないのか口をつぐんでいるのか。

私からすると、日本は世界に冠たる盗伐大国、違法林業大国である。環境破壊的林業が常態である。木材流通に関する法律だって整備されていない。

改めて振り返ると、林業界の空気は幾度か変転している。バブル経済崩壊後、林業界も苦境に陥った。森から人の姿が消え、市場の丸太の山も小さくなった。あの手この手の振

興策も、上手くいかない状態が続いていた。ところが二〇一〇年前後から、以前と違う空気が流れだしたように思う。山で人々が動きだし、林道沿いに丸太が積まれだした。丸太を積んだトラックもよく走る。一見、林業現場は活気づいたかのように感じる。

だが、それを景気がよくなったと説明するには違和感がある。漂うのは不穏で刹那的な空気だ。現場に潑剌とした明るさを感じず、働く人からも何か投げやりな気持ちを感じ取ってしまう。話をしても、愚痴や不満が多い。機械で山が荒れてしまった、木材の値が安すぎる、いい木なのに燃料にされる……。以前は何時間も森のこと、繊細な技術のこと、そして林業の楽しさを語ってくれたのに。

長年林業に携わってきた人の発する戸惑いと焦燥感。嘆きとカラ元気が交錯する。そんな状況は、林業の現場だけでない。林野行政に就く人、林業関係の研究者など専門家からも私は感じるのだ。

一方で、世間で発せられる林業や木材に関わる言葉は増えたように思う。木づかい運動、高性能林業機械、スマート林業、木造ビル、バイオマス、森林セラピー、木育、そして脱炭素にSDGs……言葉だけが踊る。だが実施される施策は、目先を変えて〝やってる感〟を競うだけの薄っぺらさが目立つ。そんな状況の末に登場したのが「盗伐」である。

そこで改めて、盗伐を核に林業界を調べてみることにした。どうやら盗伐が起きている

のは宮崎県だけではなく全国的な状況のようだ。ただ大半が表沙汰になっていない。宮崎県が目立つのは、被害者が声を上げ始め、かろうじて事件化しているからだろう。ほかの地域では、個別に盗伐の噂を聞くことがあっても、真偽が確かめられない。表に出すことが憚られるらしい。被害者が怯えている。そうした事情は本文で触れるが、日本が法治国家であるという前提さえ疑いたくなる有様だ。

そのうえ個人の犯罪とは思えない。地域あげて、業界あげての組織犯罪かのような印象を持つ。一方で、その荒っぽい手口からは、投げやりで刹那的な犯罪であるように感じた。そこに私は、腐臭を嗅ぎ取ってしまった。

日本の林業は腐ってきた。もしかして盗伐という行為は、林業界の断末魔ではないのか。それは森と人間の関わり方の一線を越えた出来事。法律を超えた倫理の崩壊ではないか。強欲にまみれた心のダークサイドに踏み込んだように感じるのだ。

なお言葉の扱いに触れておく。日本では全般に「盗伐」「盗伐材」という言い方をするが、世界的には、違法伐採、違法木材と表現されることが多い。こっそり「盗む」というよりは、法律を破って行う巨大な産業と化した木材調達が広がっている。

また英国王立国際問題研究所では、違法伐採を「伐採行為だけでなく、森林を管轄する役人などへの贈賄を含む違法行為も含まれる。さらに輸送や加工、輸出、税関への不正申告、脱税といった義務の回避も含まれる」とする。つまり、森林管理および木材生産、流通の過程で行われる不正行為全般を違法伐採と位置づけている。

そこで本書を通して、日本の盗伐事情とその背景を探るとともに、世界の違法伐採と、それを取り締まるための努力と実態を知ってもらいたい。